
真剣で私に恋しなさい！ 寡黙な夜叉

龍崎竹虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真剣で私に恋しなさい！ 寡黙な夜叉

【Nコード】

N8699Z

【作者名】

龍崎竹虎

【あらすじ】

ロシアクォーターで金髪が特徴の少年、南雲月出なぐもひたちはある日、義父に促され川神学園に編入することになった。

武神と謳われる川神百代が居るからと渋っていたが、義父の熱意に負けて渋々2-Fに編入する。

面倒くさがり屋だが根はお人好しなため受け入れられていく月出だが…？

金髪少年の明日はどっちだ！

ちなみに他のヒロインとフラグが立ちつつもヒロインは一貫して燕

予定。

台本形式になることもあるかもしれない……。

第0話 オリ主設定（前書き）

一度打ち切った過去があるので、今度こそちゃんと書きたいと思う
今日この頃。

第0話 オリ主設定

「喧嘩っ早い奴って頭ん中どーなってんだあ？ ああメンドくせえ……」

南雲 なぐも 月出 ひたち

CVイメージ 梶裕貴（『ロウきゅーぶ！』長谷川昴の声）
武士テーマ 「静」

身長 175センチ

血液型 AB型

誕生日 7月22日 かに座

一人称 俺

あだ名 ヒタチ 夜叉

武器 拳 日本刀（銘は水面月出）
みなもひたち

職業 川神学園2-F 燕宅付近のアパートで1人住まい

家族 義父1人 義妹1人

好きな食べ物 松永納豆 白米

好きな飲み物 緑茶

趣味 オートバイでツーリング

特技 料理（プロ級）

大切なもの 家族

苦手なもの 面倒くさいものは全部

尊敬する人物 義父

必要以上には口を開かない寡黙で面倒くさがりな性格の少年。
頭脳や知識が高いが競争は面倒くさいということで2-Fに編入する。

松永燕は6歳くらいの時から義父が松永久信の知り合いということ

で面識があり、向こうから興味を持たれていた。

ある意味幼馴染のような関係で、彼女に対しては自分の意見を通そうとする分、割と寛大にしている。

結果燕には懷かれていて、結構な頻度で振り回されることが多い。が、特には気にしていない。

世の中を何処か冷めた眼差しで一線引いたところから見ている節がある。

他人とあまり関わろうとしないが、何処か人を惹きつける雰囲気を持っており、話しかけると大概はちゃんと答えるので、人に嫌われるような器ではない。

自由奔放でマイペースな性格であるが、他人に振り回されることが多々ある。それでも「メンドくせえ」の一言で終わらせるし、本当は案外お人好しかもしれない。

彼が12歳のころに両親が行方不明になり、父親の友人だった現在の義父の夫婦に息子として迎えられた過去を持つ。

ちなみに義母も中学3年生の時に死去している。ちなみに12歳になる義妹がおり、多少は可愛がっている。

父型の祖母がロシア人だったため、彼はクォーターである。

小さいころから様々な武道を教え込まれており、剣道は我流で貫いてきた。

14歳のころに義父が打った日本刀、水面月出を授けられており、帯刀許可も特別で受けている。

が、「こんな物騒なものはあんまり持ち歩きたくねえ」とは本人談。刀を使う際は燕返しを得意とする。

徒手格闘の才能もあり、燕とよく鍛錬していたのでこちらも強い。ただ、燕同様に戦った回数は少なく、未知数なものでもある。

川神百代などに再三再四勝負を挑まれるが、「メンドくせえ」と一蹴するのが常である。

容姿のイメージ

白っぽいプラチナブロンドの髪で前髪は少しだけ長く目は隠れ気味。後ろ髪も男にしては長めだが、ブロンドが様になっている。

顔立ちは東洋系の作りだがパーツが整っている。瞳の色だけはクォーターの血が色濃く青色だが、前髪ですこし隠れている。

首に黒い革製のチョーカーをしており、トレードマークになっている。

着やせするタイプで、肌の色も白人系クォーターなので白っぽい。戦闘になると前髪はヘアピンでとめて分けるようにする。

第0話 オリ主設定（後書き）

主人公は実は良い人みたいな感じで書いていけたらなど。

プロローグ 編入……だど？（前書き）

プロローグを更新します。

三人称で小説書くのが久しぶりすぎる件について。

プロローグ 編入……だど？

ブロオオオオオ

愛知県の名古屋から東京都までを結ぶ東名高速の東京方面の道を猛スピードで飛ばす1台のオートバイがあった。

鮮やかなメタリックブルーの車体が日光を反射させ、金属特有の強烈な光を放っている。

そのバイクの搭乗者のまたヘルメットと上着の間からプラチナブロンドの髪が覗き、風に任せて自由に揺れている。

日本人離れした生まれつきらしい金髪はもちろん注目を浴びやすいもので、この絶妙なコントラストを醸し出す一人と一台はそれに例外なく一際視線を集めていた。

……のだが。どうもこの搭乗者が醸し出す雰囲気は“異常”であった。

遮光のバイザーから少しでも何うことのできるガラス細工を模したような青色の瞳は活気ややる気と言った光とは無縁なもので、むしろ無気力や不機嫌などのマイナスなものを感じさせる、無機質な死んだ目言える。

そんな目をした彼南雲月出は、なぐもひたち予想通り不機嫌であった。

その原因は2週間前まで遡ったところにある……。

2週間前…。

「川神学園に編入しろ。だあ？」

いつもよりも1オクターブ程上の裏声のような声が出てしまったのは、月出自身も自覚していた。

自分が行くはずのない無縁な場所に行くように命ぜられたとき、人

はこんな声が出るんじゃないだろうか？

今の彼の姿は突然辞令を突き付けられたサラリーマンのようにも見えないことはない。

「どういうこった父さん。なんで俺がああ、かの有名な超人学園に編入することになったんだよ？」

先程の間抜けな声とは違い、普段通りの冷めた声なのだが、何処か嫌味のように聞こえるあたり、彼は多少怒っているようだ。

「いや、別にすぐに行けと言ってるんじゃないよ。そこじゃねえよ。な
んで行くことになったのかってことだろうが」鉄心先生に頼まれた
んだ」

“父さん”と呼ばれたダンディズムを体現したような肉付きの良い
オールバックの男性は最初は静かに切り出したものの、途中で遮ら
れて後是为了息を吐いてから呆れたように言った。

ちなみにこの男性は月出の義父なのだが、まあこの話は別の機会に
語るとしよう。

「鉄心の爺さんが？ そりゃまたなんでだよ？」
先程から会話に登場している“鉄心”なる人物。

日本有数の武道流派、川神流を取り仕切る超人とも言える格闘家で
あり、彼の編入先と言われた川神学園の学長でもある川神鉄心とい
う人物である。

月出は父からそう言われ、5年前に一度だけ会った、どこことなく隙
のない老人の姿を脳裏に思い出す。

「鉄心さんのお孫さんの、百代さんが居ただろう？ 確かに腕が立
つんだが、あの娘の場合強すぎて戦う衝動が抑えられないようだね。
気軽に手合せできる人物を探しているらしいんだ」

“百代”という単語が出た時点で、月出の眉は面倒くさそうにひそ

められた。

川神百代が話題に上ったとき、自分にとって良い話が出たためしかなかったからだ。

「それで俺に白羽の矢が突き刺さったと？」

「いやその表現じゃ痛そうだよ……。まあ良いや。とりあえずしゅうゆうこと」

何処かで聞いたことのあるネタで返され、この場面での父親のセリフを疑った月出だが、敢えて突っ込まないあたり彼なりの優しさというもののかもしれない。

「で、君はもちろん行ってくれるよね？」

ダンディさからかけ離れた満面の笑み。初老の男性特有の優しげで人好きのする笑みで父親は訊ねた。

「だが断る」

先程の満面の笑みのまま、父親の表情は液体窒素に漬けられたかのごとくフリーズした。

背中には冷や汗が滝のように流れている。

「頼むよお。2週間くらい時間あるからさあ」

「2週間もありゃ充分だ！ さっさと電話入れて断ってこい！」
自然と月出の声も大きくなり始める。

「でも、松永のとこの燕ちゃんももうじき川神学園に編入するらしいよ？」

先程まで不機嫌なオーラを全身で出していた月出が嘘のようにおとなしくなった。

その理由に一つ、彼は“松永燕”という人物に信頼を置いていたからだ。

自分の幼いころから慣れ親しんだ女性で武道の腕も強く、自分が戦った中で認めることのできる存在。そんな燕が編入するならまあ百

代から受ける被害も減るだろうと踏んだのだ。

「それなら別に2週間後、受けてもいいぞ。燕が来るなら負担減りそうだし」

父親はフリーズから解き放たれ、再び笑顔をぱあつと輝かせる。

「君は本当に素直じゃないなあ。燕ちゃんが好きだからそんなに行きたくなかったのかい？」

息子の弱みらしい部分を発見したことを喜んだのであろう。だがしかし、一般的にそれだけはやってはいけないということがあ

る。その内には月出をからかうということも含まれていた。

「じゃあまず2週間の期間の内に、あんたを甚振らないといけな^{いたぶ}いな」

月出の笑みは、それはそれは、言ってることは真逆の、見る者を釘付けにさせるような素敵なものだった。

「なあ父さん。サファリパークのライオンゾーンに生肉のジャケツト着せて入れられるか、マグロ漁船に縛り付けられて遠洋漁業に出るか、どっちが良い？」

父親は本日二度目の冷や汗を流し謝罪したが、その数秒後、ダンディズムとはかけ離れた情けない悲鳴が上がったらしい。

……というようなやりとりがあったわけで、渋々ながら月出は新しい生活場所の神奈川県川崎市に向かったのだ。

あの後、結局彼のむしゃくしゃした心は少ししかおさまらず、周囲のドライバーたちを震え上がらせる今に至るわけだが…。

「お、次の出口で高速降りるか」

実はそれももう消えかけていた。

彼は新たな場所に、少し心を躍らせていたのだから……。

京都の某所

??? 「月出君が居ないとつまんないよー!!!」
黒色のロングヘアをした美少女がそう叫んでいたんだとか。

プロローグ 編入……だど？（後書き）

最後の人は分かりやすいですね。
というかこの回にも名前出てきてたし。

第1話 はじめての川神市（前書き）

午前中に半分くらい書いてたのに。

自動更新プログラムの所為で再起動↓セッション復元したら全部消えてら＼（＾Ｏ＾）／オワタってなりました。

11時から6時くらいまで部活の掃除＋練習をして帰ってから続き書こうとわくわくしてたのになあ…。

しかし後悔先に立たず。まあ、新しい展開も思いついたし、ポジティブにアグレッシブに行くつもりです！

第1話 はじめての川神市

さて、あれから数十分オートバイを乗り回し、神奈川県にまでやってきた月出だったけど…。

現在の時刻は正午を回ったところで、鉄心に指定された時間——2時にはまだ少し時間があつた。

よくよく考えてみれば2、3時間ほどオートバイに乗りっぱなしで、月出は昼食を摂っていなかったことに気が付いた。加えて腹の虫も控えめに鳴いている。

何か食べるかと思い立ち寄ったのが、神奈川県でも有数の名所七浜中華街である。

4月の2週目で尚且つ今日は金曜日で時間帯も昼間という中途半端な状況であつたから、この中華街もいつもと比べれば少し空いていた。

そんな中華街でとりあえずラーメンを空腹が満たされるまで食らった月出は、次に自分の暮らす予定のアパートまでオートバイを走らせる。

特に特徴もない3階建てのアパートであるが、立地条件はそんなに悪くない。

川神学園までならそれこそ徒歩十数分で何とかなるほどの距離で、文句なしのアパートだった。

ただ家賃は割と良心的ではないものなので、父親からの仕送りを足してもまだ少し必要だ。

高校生がお金を貯める手段といえば、行きつく答えはただ一つ。アルバイトである。

まあこれは週末である明日か明後日にでも探せばいいという結論になった。

ここまでで時刻はもうすぐ1時30分になろうとしていた。さすがに初っ端から遅刻というのは不味いと月出は考えたため、早々と愛車のメタリックブルーのオートバイのエンジンを吹かした。

キングクリムゾン！！

今、テンプレなものよりさらに上の段階に行くような設備の学長室で高そうなソファに腰かけていた。

「久しぶりじゃの、月出」

対面には川神学園学長で、月出をこの学園に呼び寄せた張本人である川神鉄心が同じようにソファに腰かけている。

先程はカンフー服のような服装をした「お前はブルー○・リーか！？」と突っ込みたくなるような雰囲気 of 川神流師範代、ルー・イーが居たのだが、彼は月出を案内して早々に退室していった。よって現在は月出と鉄心の2人だけで話している。

「ああ、久しぶり。相変わらずだな、鉄心の爺さん」

月出はというと、探るように鉄心を見据えていた。

「（5年前と本当に変わんねえよ鉄心の爺さん……。父さんに聞いた話だと「俺が生まれたときから変わってねえ」……。か。あながち間違いないじゃねえな）」

父親が生まれたとき、要するに40年以上も前から変わっていないという事実には、表情には出していないが月出は少し引いていた。

「さて、本題に移ろうと思うのじゃが。お主の父親から話は聞いておるな？」

さっきまでの懐かしむような語り口ではなく、真剣そうな口調に変貌した鉄心。

「ああ。百代さんの相手ができる奴を探している。だったか」

「うむ。モモは史上でも最高と言えるほど素質があるんじゃないか……。どうしても強い者と戦いたいという欲が強すぎるようなんじゃない」。現役を引退したとは言え、それでも人類最強の部類に入る彼が眉を寄せて悩んでいるようだった。それを見て月出も割と深刻なことなのだろうと感じ取る。

「戦いたいという強い衝動は危険だもんな。あの人の場合は相当強い衝動なのだろう」

5年前一度戦ったときの奴の目を思い出すよ。と月出は付け足した。それに加え、今では彼女と互角に戦えていた揚羽さんも、高校卒業後は実家の九鬼財閥軍事部門のトップであるという。そんな立場上、もう百代と手合せする暇も簡単には作れないだろう。

そして武神と言われるあの川神百代だ。互角に戦える人類がこの地球上には一握りしかない。

月出の知る限りでは百代と同じ川神四天王の橘天衣に剣聖黛十一段の娘、あとは自分の最もよく知るところの武人である松永燕くらいだ。

「お主は5年前に一度、モモに勝っている。だから今回もその力を頼ってみたんじゃが……」

「ああ。そういうことならメンドクせえけど別に良いよ。まあ俺だって生身の人間だ。そんなに頻繁に相手は出来ないけどな。2週に1度くらいなら大丈夫だろ」

月出の答えを聞いて、鉄心は珍しく喜びを露わにした。

「そ、そうか、助かるぞい！ いや2週に1度で結構結構。むしろ十分すぎるくらいじゃ。これでモモの衝動も治まると良いんじゃないかなあ……」

「ま、やってみねえと分かんねえよ。じゃ、来週の月曜からで良いのか？」

「うむ。そうじゃな。もうお主の編入するクラスは2－Fに決めたからの。競争とかない方が気が楽じゃろう？ 朝は少し早目にまた

この部屋まで来るとよい」

そこまで配慮されていることに月出は若干驚き、感心した。

「そうだな。じゃあまた月曜日に頼むわ」

色々なことを話し込んでいたからか、もうすぐ4時を回ろうとしていた。

下校する生徒が帰り道をぞろぞろと歩くのを想像してメンドクせえと呟いた後、月出は足早に駐輪場まで向かった。

アパートにて…。

引越し屋から運び込まれた段ボール2箱と少し小さめの本棚、あとは帰りしに受け取ってきた制服などを整理していた。

すると不意に、見慣れた番号から着信が来たのを確認し、月出は2つ折り型で黒い薄型携帯電話を開いた。

「やっほー！ 燕だよー。月出君元気い！？」

天真爛漫というか元気潑刺とした幼馴染の声に、ローテンションが常の月出は少し顔をしかめる。

「いつもどうりだが。なんか用か？ 燕」

学年は燕のほうが上なのだが、燕は2月生まれで月出は同じ年の7月生まれ。実質半年くらいしか変わらないため、月出は燕に言われたこともあって呼び捨てで呼んでいる。

「うー。なんか素っ気ないなあ。愛しのお前が居なくて寂しいくらいは言ってよー」

この口ぶりからして月出は携帯電話越しでも燕が拗ねている様子を察知できた。

「からかうんじゃないよ。まあ燕も1か月くらいしたらこっち来るんだろ？」

「それでもやっぱり君が居ないとちょっぴりつまんないよー。放課後が少し暇じゃん」

京都に居たころは大概燕に何か付き合わされていたのが日常だった

ため、彼女にとってもそれがおそらく日常として定着していたのだろう。

「ま、メンドくせえけど別にメールや電話してくるくらいなら構わねえよ。バイト中はさすがに無理だがな…」

「（面倒くさいって言いつつもそういう風に優しくしてくれるところ、昔から変わらないなあ）じゃ、また追々メールするね！」

「おう、じゃあな。あ、燕」

「ん、何？」

「確かにお前のことは愛しいかもな」
そう言って月出は電話を切った。

そのころの燕…。

「え？ 最後、月出君はなんて言ったのかな？ 「お前のことは愛しいかも」って言ったよね？」

彼女の可愛らしい顔立ちに、いつの間にか朱色の気が差している。ベッドに座りながら通話していたのだが、通話が終わるときの月出の一言が原因でベッドに倒れこみ、枕に顔を押し付け、足を左右交互にジタバタと動かして悶えた。

月出はいつも、あまり冗談を言わないのだが、意外と電話などでは冗談も言ってくる男だ。

そんなに簡単に信用してはいけない…のだろうが。今の燕は戸惑っていた。

「え？ ええ！？ これって喜んでいいのかな？ まあ、とりあえず1か月後に月出君に聞けば良いよね？」

松永燕という少女は、ある出来事から南雲月出という男に特別な感情を抱いていた。簡潔に言えば惚れていた。

今の彼女は、普段のように天真爛漫だが裏では何か考えを巡らせる武士娘ではなく完全に純粋な恋する乙女となっていたのだ…。

「待っててね、月出君」

彼女の心は語尾に音符やハートが付きそうなほどに踊っていた……。。

「まあ、俺は冗談で愛しいとかいう人間じゃないと自負してるんだけどな…さあて、面接受けれる用に連絡入れないと」

燕との通話が終わった後、月出はバイト求人情報誌を一通り眺めてから何件か候補を絞ったようで、再び携帯電話を取り、とある寿司屋の電話番号を入力し始めた…。

第1話 はじめての川神市（後書き）

終わりがたビミョいっ！

そして月出の一言に悶える燕さんマジ乙女。
可愛くかけていたら…良いんだけどなあ…。

第2話 アルバイトの先輩、それは風の男!?(前書き)

燕さんが可愛くて生きるのがつらい。

12月30日AM10:46 報告を受け誤字修正。

第2話 アルバイトの先輩、それは風の男!?

さて、金曜日から1日飛んで、今日は週末の日曜日である。

土曜日に宅配寿司屋のアルバイトの面接に行った月出だが人手不足らしく、問答無用で即採用、日曜日の晩からでも入ってくれということだった。

店長の目は救世主を迎えるような感激の色が濃く映っていたという。それ以外に土曜日に特筆することもないというわけで今日の日曜日である。

つつてもバイトまでは暇だよなあ……。と月出は思うのである。まだ来て間もなく住み慣れない街という点以外は特にいつもと変わらない。

そう、この南雲月出は実に順応性の高い男であった。彼曰く、「幼いころから複雑な環境に放り込まれすぎた」とのこと。

……この男の場合は何が起こっても「メンドくせえ」の一言で済ますという点から、通常の間人よりも驚きという感性があまり仕事をしないのであるが…。

「最近はそんなに歩いてもいないし散歩でもしながら、この土地のこと把握するのも良いか」

そう呟くと、彼は昨日の面接帰りに買ってきたジーンズに足を通し、財布と携帯電話だけを持って出かけた。

……またこの男は、考えたらすぐに行動に移す男であり“優柔不断”という言葉が逐一似合わない人間でもあった…。

彼はまず比較的家の近くにある仲見世通りなどを通ってみた。視界に入るのは大量の観光客たちが行き交いする道。これを目にして彼は一言「メンドくせえ」と言った。

この場合、この観光客でゴった返す中に行くのが面倒くさいのか、この光景を目にして余計に無気力になったのか。いや、南雲月出という人間の場合はその両方を兼ねた意味で言ったのであろう…。

何とか人ごみを抜けて、今度は彼は河原にまでやってきた。

あまりがやがやとした賑やかな雰囲気が得意ではなかったから、むしろこういう懐かしい雰囲気の中で落ち着いた場所というのが好ましいのである。

草の上にごろんと寝転がり、ふと地元の人間に変態大橋と呼ばれている橋の周辺を見て彼は「あ」と何かに気付いたように、感嘆を漏らした。

彼の視線の先には、自分とおそらく同じくらいで日本人女性にしては高い175センチ、胸元には存在を強く主張する大きな2つの球体がある。

更には腰あたりまで伸びているであろう日光を浴びて優しい艶を出す黒髪までもがその女性の存在感を助長させる…。

月出はこの女性に見覚えがあった。というか、拳を交えたことすらあった。

彼女こそ彼が川神学園に編入する理由の大元である少女、先日再会した川神鉄心の頭を悩ませる孫娘、川神百代であった。

鉄心の話を聞く限り「彼女は戦いに飢えている」とのことだが、今の彼女は空手の胴着を着た武道家らしき人物と数メートル挟んで向かい合っている。

大方、鉄心への挑戦者がまず百代と手合せをして勝ってから来いと促されたのであろう。

武道家の表情は険しさと疑問が入り混じっており、何処か複雑そうに見える。

恐らく「川神鉄心はなぜこのような小娘と手合せさせたのだろうか？　自分は愚弄されているのであろうか？」という疑問からであろう。

だが、手合せが始まった時、彼は真相を知った。

「では、行かせてもらう!!」

「来い！」

百代の表情は男とは対照的にワクワクとしたものであった。

男が拳を振りかぶると、百代はそれを軽々と避け…。

「川神流正拳突き!!」

技名を叫び拳を突き出すと、挑戦者の男は天高く吹っ飛ばされていた。…おそらく星になったであろう。南無。

それを見るまでもないと言った様子で、彼女は詰まらなさそうに溜息をついた。

「はあ…。5年前のアイツみたいに、もっと私以上に強い奴とか居ないのかよー」

彼女の視線がこちらに向く前に、月出は足早にその場を去ったのだ。…。

「おや？　あれは…。アイツと雰囲気は似ていたが、私の見間違いか…？」

彼女の眼はわずかだが、向こう側に消えた金髪が特徴の男――月出の背中を捉えていた…。

午後6時…。

あれから様々なところを回った月出は、確かに来た時よりもこの街のことを把握できるようになっていた。

昼飯などはまた七浜中華街で摂った。その際に金髪のアメリカンな雰囲気漂うメイドと黒髪のクールそうなメイドという対照的なコン

ビを見かけたが、やはり彼は気にする様子もなかった。
家に一旦戻ってからはバイトが入っている時間だったので、また支度をして店までバイクを飛ばし、今に至る。

「おお！ お前が新入りかぁー！ あのオートバイすっげーかつこいいな！」

イケメンだが何処か子供っぽそうな印象を与えるバンダナをした少年に声をかけられた。

「ありがとう。ところでアンタ、名前は？」

「おう、悪い悪い。風間翔一っていうんだ。そう言うお前は？」
本当に風のような印象を受ける好青年である。

「俺は南雲月出。年は今年の7月で17だな。バイトでは風間のほうが先輩みたいだし好きに呼んでくれ」

「おお、俺と同じ年か！ じゃ、俺は月出って呼ぶぜ！ 俺のことも好きに呼んでくれて構わねえ。よろしくな！」

ニツコリと良い笑顔を浮かべた風間に釣られ、月出も珍しく口角を上げた。

「んじゃ俺も翔一って呼ぶわ。よろしく頼む」

「おーい、風間君に南雲君！ そろそろ宅配に行ってくれ！」

「「はーいー！」」

店長の声で我に返った2人はそれぞれの配送車まで走る。

まだ月出は、この風間翔一という男が近い内にもっと近い場所に居るとは予想し得なかった…。

「ふう…。ただいま」

時刻は午後11時。片づけの手伝いなど諸々を終わらせ部屋に戻った月出。その手には今日売れ残った寿司パックの入った袋が握られていた。

月出がこのバイトを選んだのはくいっぱぐれをしなさそうだったからだ。

今日もこうして晩飯を手に入れることができる。食糧には困らないし、給料ももらえる。一石二鳥だったのだ。

「さて、明日から学生だし、飯食って、シャワーしてから寝るかな……うげっ」

携帯を見て月出は珍しく苦悶の声を上げた。

不在着信が10件近く、メールもそれと同じくらいの量が受信されており、どちらも発信者が松永燕と表示されている…。

月出の米神辺りから一滴の冷や汗が流れ出た。

とりあえず謝らねばと携帯のアドレス帳から番号を選択し、通話ボタンを押す。

……と、僅かワンコールで燕が電話に出た。

「もしもし？ 月出君？」

その声は明らかに怒気を孕んでいるものである。

「あ、ああ。燕か？」

「うん、そうだよ。君に10回ほど電話とメールして、一度も反応してもらえなかった燕さんだよ」

10回という部分を強調しているあたり、かなりお冠のようだ。

「彼女とのデートは楽しかった？」

月出は一瞬、こいつは何を言っているんだ？ という表情になったが、誤解されていることに気付く。

「俺に彼女なんて端から居ないっての。電話やメールに反応できなかったのはバイトに出てて携帯を持つのを忘れてたんだよ」

「……ほんとに？」

やはり疑われる。

「本当だ。お前に嘘をついて一体全体何になるっつうんだ？」

「んゝ……」

唸っている燕に焦らされ、月出はある提案をした。

「お前がこっちに来たとき、何か一つ言うことを聞くから、それで手を打ってくれよ」

燕はそれを聞いて機嫌が良くなったようだ。

「じゃ、信じるから楽しみにしとくよっ！」

「お前はそうやって元気なほうが良いよ。じゃ、早めに寝ろよ」

「うん、またね！」

電話が終わった後、日付が変わる前に寢床につくため、月出は寿司に手を付け始めた。

「働いた後の飯は旨い……」

まるで仕事帰りの初老のサラリーマンのようなセリフを言う月出。

これでビールが旨いと言っていれば、余計おっさん臭くなっていたことだろう……。

その後は予定通りシャワーを浴びてから日付の変わる1分前に寢息を立てた。

通話後の燕。

「うう……。日曜の夜だし、てっきり彼女とデートにでも行ってるのかと思ったよ……。でも月出君が嘘を言うとは思えないし……」

ここ数日の燕は彼女らしくなかった。もうそれは父親である久信が体調を崩しかけるくらいに。

「ま、良いや。代わりにデートできる口実ができたしね……えへっ」

すこし想像をしたようで、燕は赤くなりつつ微笑んだ。恋をすると人はここまでも変われるものなのだろうか……？

第2話 アルバイトの先輩、それは風の男!?(後書き)

燕さんのキャラが少し掴めないなあ…。

ふあ…ねむ……。

第3話 自己紹介って上辺だけ言うのが普通だよね(前書き)

はい、というわけで3話更新です。

なにが「というわけ」なのかは僕にもわかりませんっ。

第3話 自己紹介って上辺だけ言うのが普通だよ

朝起きると、時計の針は6時を指していた。

本当はもつと寝ていた月出なのだが、学生という身分。昼食を作っていないといけない。

「学食で済ませば良いじゃん」という指摘はもつともかもしれないが、彼の場合は仕送りとバイトの給料を足して初めて家賃と光熱費が足りる、カツカツの生活を現在進行形でしている。

だから彼はあまり贅沢は言えないのである。何処かの浪費夫人が「弁当を作るのが嫌なら学食を利用すれば良い」なんて言った暁には、殴り飛ばすのがオチであろう。

昔の人は言いました。

「贅沢は敵だ！ 欲しがりません勝つまでは」

と。……しかしこの場合、彼は一体何に対して勝つのかはわからない。おそらく自我の欲求と勝負をしているのだと考えるものだ。

さて、そうこうしているうちに何処かの馬鹿学生は塩水や砂糖水を食事と言っていたが、彼の場合はまだ料理と言えるものを作った。

食材さえ与えていれば、高すぎるコック帽を被った料理人でさえも舌を巻く料理の腕があるので、本当に不憫というものである。

閑話休題。

……朝食を食べ終え、教科書やノート、弁当など、粗方を準備し彼は川神学園生として第一歩を踏み出す。

鉄心には早めに来いと言われていたため、在校生たちの群れの中を行き目につくのも嫌だった彼は、少し時間帯を早くして家を出たのである。

河原沿いを歩いていると、今時珍しいブルマ姿で赤っぽい茶髪の少

女が走っていくのが見えた。

それが普通に走っているだけなら、

「練習熱心なんだな。この学校の生徒は」

と思えただろうが、まあそんな悠長なことは言えるはずもなかった。何しろ腰のロープで引っ張っているものが非常にアブノーマル。華奢な少女の体躯に似合わぬ数個の大きなタイヤ。

今時スポ魂漫画と銘打っている作品でも見かけないような極端なトレーニング方法だったからだ。

ちなみに、何故ブルマというだけで川神学園の生徒か分かったのかと言えは理由はあの鉄心の爺さんである。

金曜日に説明を受けた際体操着について、

「ワシが生きとる限り、この学園の女子の体操着はブルマじゃ！」と熱弁を揮っていたいたからだ。当然月出は白い眼で見ていたが、そんなわけで学園の生徒だと把握したわけだ。

「ユウオウ！ マイシン！」

と良い笑顔で元気に声を出しながら走る少女を尻目に、月出はゆっくりと歩いて行く。

まああの少女が速く走りすぎているだけであり、彼自身の歩く速度はむしろ常人よりも速い方なのだが。

ところ変わって学長室である。

金曜日と同じように月出と鉄心の2人がテーブルを挟んでそれぞれソファに腰を掛ける。

外からは続々と登校してくる生徒たちの声が嫌でも耳に入ってくる。

「うむ、言った通り早くに来たの。感心じゃ」

「そりゃまあ、な」

軽いやり取りを何度か繰り返していると、学長室の部屋が2回ほど、謙虚にノックされた。

「開いとるぞい」

入ってきたのは20代中盤から後ろくらいのどこかサディズムを感じさせる女性であった。

実はこの女性が月出の所属することになる2-Fの担任、鬼小島こと小島梅子であるから驚きである。

……教師が鞭を所持しているという悪い意味での驚きである。

「失礼します」

声や喋り方も姿のまま堅いものであった。

「おお、小島先生。この子が、2-Fに編入する南雲月出君じゃ。

朝のHRで紹介さしてやってくれ」

「わかりました。今日から君を担当する、小島梅子だ。ウチのクラスは特殊な面子が多いが、まあおそらく仲良くやっていけるだろうと思う。これから朝のHRだから、私と一緒に教室まで行こうか」

“特殊な面子”という小島の言葉に若干の疑問を覚えた月出。

特殊なこの学園において、この真面目そうな担任に“特殊”と言える面子。一体どんなものなんだろうか？ と。

☆

月曜日の朝、2-Fの教室は専ら今日から編入してくる生徒の話題で持ちきりだった。

木曜日あたりに担任の小島がHRで編入生が来るという案件を伝えたから、多くの人間とパイプを持つ直江大和と風間翔一が始めた性別がどちらかを賭けるという行為を中心にすでにここ数日、話題になっていたのだ。

大和の巧みな情報操作で編入生が女性であるというものを信じたものが多く、その掛け金の大半が女であるという予想に向いていた。その結果が今日の朝のHRでわかるのだから、朝っぱらからこま

で盛り上がっていたのである。

「おはよう諸君！」

「皆さん！ 先生が入られましたよ！」

小島の挨拶が教室に響き、そのあとすぐにロリっ娘委員長が皆に促したため、全員が静かに、そして迅速に、自分の席に着いた。

が、やはり編入生の詳細が気になるのか、声は出さずともほとんどの者がワクワクとした雰囲気醸し出していた。

「お待ちかねの編入生を紹介しよう」

「せんせい！ 編入生は男ですか？ それでイケメンですか？」

「編入生って女？ それで美少女か？」

小島に反応した前者が和菓子屋の娘で読者モデルをしている茶髪の小女、小笠原千花。

後者が“自称”戦場カメラマンで、エロさに定評のある小柄な少年、ヨンパチこと福本育郎だ。

「小笠原に福本！ お前たちは後で指導する必要があるそうだな」

小島が厳しめに注意すると、2人は引き下がった。

「ちなみに編入生は男だ。入りたまえ！」

小島に言われ、教室の外で待機していた月出がドアを開け、中に入る。

外国系の天然の金髪に少し白めの肌。細めの体軀だが身のこなしはしっかりとしている。

表情は少しムスツとしているが、端正な顔立ち。少し長めの前髪の間から覗く青色の瞳。

ただ一人、彼を知っている者が居た。

「おい、月出じゃねーか！ お前が編入生だったのか！」

バイト仲間が編入生であることを知り、翔一は嬉しそうに声を上げた。

また、教室の女子陣は歓声を上げた。

「クール系のイケメンだわ！ エレガントクワットロ候補ね！」

「超タイプなんですけどぉー！」

などなど。男性陣はその容姿を見て悔しそうな顔をするものがほとんどだったが。

それでも皆興味ありげに視線を送っている。

チョークで黒板に南雲月出と書く。

見た目とは違い達筆で、流れるような綺麗な字に教室にいた全員が息を呑む。

「京都から編入して来た南雲月出だ。マイナーだが月が出と書いてヒタチと読む。まあ好きに呼んでくれ。よろしく」

簡潔に自己紹介を終えた月出。

「さて、皆南雲に質問はあるか？」

小島が言うのと大半が挙手した。

「風間君と知り合いなの？」

「南雲君はハーフ？」

これらは女子の質問。

「翔一とはバイトの職場が同じなんだ。知り合ったのは昨日だが。父方の祖母がロシア人。だから俺はクォーターだな。髪も瞳の色も生まれつきだよ」

「武道は何かやってるの？」

この質問はワン子だ。

「格闘技の大半は心得ている。まあロシア系だからシステムやコマンドサンボは得意」

「前髪で目が隠れるってどこのエロゲの主人公だよ」

これは大串スグルだ。

「俺の場合は切ってもすぐ伸びてくるから。戦うときはヘアピンなりに掻き上げてるよ」

「趣味は何ですか！？」

「今は専らオートバイでツーリングしている。料理も多少は得意だ」

そこでHR終了のチャイムが鳴り、授業間の休憩に入る。

それでも月出が座った周りに女子陣が詰めかける。

「南雲君は好きな女性のタイプとかある？」

「俺が好きになった女性がそうなるんじゃないのか？ まあ特に決まった基準とかはない」

自分にチャンスがあると悟った女子陣はまた歓声を上げた。

そこに翔一が割って入り、月出に話しかける。

「まさか編入してくる奴が月出だったとはびっくりだぜ！ よろしくな！」

「ああ、俺もまさかとは思ったよ。よろしく」

翔一に続いて一緒にいた大和たち風間ファミリーの面々も自己紹介していく。

「俺は直江大和だ。キャップの知り合いだったとは思わなかった。よろしく頼む」

「キャップってのは翔一か。俺としてもよろしくしたいところだ」
その様子を見て皆感心する。最初の気怠そうな印象とは違い、ちゃんと話しかけると対応するからだ。

「意外とちゃんと返答するのね。私は川神一子！ よろしくね南雲君」

「川神というと…鉄心の爺さんの孫かなにかか？」

「学長と知り合いなのか？」

大和の疑問にもしっかり答える。

「ああ、5年前にも一度会ったことがある。何せ俺をここに呼び寄せたのもあの爺さん」

その言葉に皆疑問を持った。なぜこの少年がああ学長と知り合いなのか、そして呼ばれてこの学園に来たのかと。

「私は直江京」

「ああ、直江の嫁かなんか？　じゃ呼び方にも区別つけないとな。直江嫁でいいか？」

「嫁……良い響き」

その言葉に京は頬に両手を当てて喜んだ。大和がそこに突っ込む。

「いや違う。こいつは椎名京。弓使いだ。断じて俺の嫁とかではない」

「断言された……。でもそんな大和も好きい」

突然ガバツと大和に抱き着く京。

「うわっ！　やめろ京！」

そんな様子もいつものことと皆放っているようなので、月出もスルースる。

「僕は師岡卓也。よろしく」

「俺様は島津岳人だぜ！　イケメンは腹立つがキャップの知り合いなら仕方ねえよろしくしてやる」

痩せた方の少年がモロで、筋肉質なほうがガクトである。

風間ファミリーをはじめ、根はお人好しな部分が知られた月出は、意外と早くクラスに馴染んで来た。

ファミリーの面々をはじめ、アドレスなんかを一応交換する。

それで今日は終わるかに見えたのだが……。

「おい大和！　金貸してくれ！」

最後の授業が終わった教室に、昨日も見えた少女——百代が入ってきた。

「ああ、姉さん。ちゃんと前の分も返してくれよ」

「堅いこと言うなよー。お？　この金髪は誰だ？」

すると早速月出を見つけた。

「今日来た編入生で、南雲月出。学長と知り合いらしいよ」

「ジジイの……？　ひょっとしてお前、5年前に会ったことがあるか？　そして昨日、私の手合せしていた河原に居合わせてなかった

か？」

意外と早く指摘されたが、月出という男は普通に明かした。

「確かに一度会ったことはあるな。それに昨日はたまたま居合わせただけだ」

その言葉に百代はニヤリと美貌を厭らしい笑みに変える。

「ほう…。面白い奴が来たな…」

「姉さん、南雲のこと知ってるの？」

「ああ、なにせこいつは…」

百代は大和の疑問に答えるが、少し間を空ける。

「5年前、私と死合って勝った奴だからな」

百代の一言に、教室中が爆発したかのように驚きの声が響く。

ただ渦中の月出はというと目を瞑って指で耳栓をしているのであった……。

第3話 自己紹介って上辺だけ言うのが普通だよね（後書き）

少し短めかな？

描写はないけどこの日も燕さんは家では悶々としていたり。

第4話 月出の実力？（前書き）

月出の実力が垣間見えます。しかしこれが本当の実力ではないのです。

途中にはあの娘も出てきます。

そして燕さんが可愛すぎて文章で表現するのが難しい件について。

第4話 月出の実力？

2—Fの教室は騒がしくなっていた。その原因は自他共に認めるこの学園最高、いや最強の美少女川神百代が言い放った、

「ああ、なにせこいつは……5年前、私と死合って勝った奴だからな」

この一言が原因だったのだ。

「ええええ、ちょっ！　どういふことだよモモ先輩！　じゃあ南雲はモモ先輩より強いっていうのか！？」

「そうよ、お姉様が負けるなんて、信じられないわ！」

皆驚愕の事実には呆然とする中、ガクトとワン子が真っ先に百代に訊いた。

「ああ、まあ5年前の話だから今はどうかわからないけどな」

その返答を聞いて皆一斉に月出を凝視する。

「なあ南雲、姉さんの言ってることは本当なのか？」

大和に訊ねられた月出の表情は何処か気怠そうなものであった。

「……モモさんが倒れてからすぐ後に俺も倒れたから、あれは勝ったのかかなり微妙だったけどな」

「いや、そんなことはない。確実にあれは私の負けだ」

それよりも。と彼女は言葉をつなぐ。

「月出！　もう一度私と勝負しろ！　最近強い相手に飢えているんだ！」

百代のその時の様子は、美少女というより狼と表現した方がぴったりだったと後の月出は語る……。

そんな剣幕で寄ってくる百代を月出は右手で制した。

「確かに俺がこの学園に編入したのはその為だ。だが条件がある……」

「なんだよ？　言ってみろ」

不審そうな表情になる百代。

「とりあえず鉄心の爺さんが監督をしている元で行うこと、それとそう何度もやってると俺が持たないから2週に1度の条件で行うことだ」

じゃあ！ と鉄心呼びに行こうとする百代に「爺さんは確か明日まで留守らしいぞ」と月出は促す。それを聞いて百代は詰まらなさそうな表情をした。

「なんだよー。せっかく久しぶりに全力で死合えると思ったのに…じゃあ水曜日はどうだ！」

百代が制服のワッペンを月出の机に勢いよく叩きつけた。

「水曜ならまあ、朝礼の日らしいから居るだろう。受けて立とうか」対照的にそのワッペンに優しく重ねた月出。しかしこれで川神学園流の決闘が成立した。

2人の周りの生徒はファミリィを含め皆呆然とするだけである…。

その日の帰り道。

月出は思わぬ失敗をしたことを自覚した。

「（部活やってないからマシとは言え、帰宅ラッシュの真ただ中じゃねえか…）」

そう、オートバイは事前に釘を刺されているため使っていない。

要するに行きが徒歩なら帰りも徒歩。行きは出る時間さえ変えればラッシュなど気にならないが、帰りしは終わる時間が皆同じなため、そうはいかない。

面倒なことの中に数えられる混雑というものが何より嫌いな月出にとって、これは苦痛であった。

そんな彼の耳に聞き覚えのある声が届いた。

「おーい！ 月出！」

まるで友達を呼ぶ少年のような口振りで月出を呼ぶ男。月出はそんな知り合いは1人しか知らない。

「おう。翔一か」

振り返ってバンダナの少年、翔一に返事を返す。

その後ろには百代、大和、京、ワン子、モロ、ガクトのファミリーの面々が並んでいる。

「いつの間にか教室から消えてたからよ。今日はオートバイじゃないのか？」

「金曜日に手続的なことを済ませに来たんだが、その際に爺さんから「おーとばいはダメじゃ！」って釘刺されたんだよ」

意外にも鉄心の口真似をする月出。“おーとばい”と片言になっている部分までしっかりと再現しているため、ファミリーの面々は吹き出す。

「はははは！　なんだよそれ、つかお前モノマネ似過ぎ！」

翔一は特に受けていたみたいだ。

「なあ月出。お前美人の知り合いとか絶対いるだろう。今度私に紹介しろ」

さっきまで大和を弄って遊んでいた百代だがそれに飽きたらしく、月出の方にやってきた。

「ズリィぞモモ先輩！　おい月出、俺にも紹介してくれ！」

その話題にガクトが食いつく。キャップやモモ先輩がそう呼ぶからと月出という呼び方に変えたらしい。

「京都での女の知り合いとか、幼馴染と義妹いもうとくらいだが」

……月出の場合は女性が必死にアピールしても気づいていないだけなので、こういうところは翔一と似通うところがある。

「それでも良い！　少しでも！　この世の美少女は全て私のものだ！」

「じゃあまた今度紹介するからそれで良いか？」

燕は1か月後辺りに来るはずなのでまあ良いやといった様子で答えた月出。

「ああ、絶対だぞ！　……おや。河原に不良どもが居るぞ」

変態橋を渡り終え、少し歩いた場所に、不良たちが居た。

「大方姉さんに喧嘩売りに来たんじゃないの？」

「だね。モモ先輩ならあり得そう」

大和や京たちの意見はもつともであった。

それを証拠に、不良たちは百代の姿を見るなりキーキーと喚き始める。

「おい！ アンタが川神百代か！」

「そうだがなんだ！」

「俺たちは七浜のチーム、九尾の犬だ！！」

「武神とか言われているお前を潰しに来た！」

百代に対しそんなセリフをかわりがわりに言っている。

「なんか面倒だなー。おい月出。お前が行って来い。衰えてないか確認したいし」

「俺かよ。メンドクせえ。モモさんが行ったらどうだよ…」

「じゃあ仕方ないな…おい！ お前たち！」

何か考え付いたようで、ニヤリと笑ってから百代は不良たち呼びかけた。

「あぁん！？ なんだよ！！！」

「この金髪の男を倒せたら私が戦ってやろう。ほら、行け月出」

「上等だコラァ！！」

月出は仕方なく河原まで下りて、不良たちの前に立った。

その様子を見て下校途中の生徒たちがギャラリイとして集まる。

その時のファミリィ

「おいおい姉さん、月出に任せて大丈夫なのか？」

大和の問いに百代は笑いながら返した。

「言っただろう。私に勝った奴だ。私は今、戦うよりもあいつの戦いが見たい」

「なら良いけど…お、ヘアピンみたいなもので髪を掻き上げたな。」

あいつ、雰囲気変わった？」

「前髪を上げたのもあるみたいだけど、戦うから闘志が出てるね」
目の良い京は詳しく見えたようだ。

「今日はモモ先輩じゃないの？」

「あの金髪、ウチの学園の生徒みたいだけど、あんな奴居たっけ？」

「イケメンだけど、本当に不良に勝てるの？」

などなど、疑問の声が出ているが、ファミリーたちは気にしていなかった。

「よし」

月出は前髪を赤い大きなヘアピンで後ろに掻き上げ、両脇の髪を小さいもので横に固定する。

「準備は良いか？ あんたら」

その質問に不良たちはいきり立つ。

「当たり前だ！ 余裕かましてんじゃねーぞてめえ！ その綺麗な顔ポッコボコにしてやる！」

1人が金属バットを月出に向けたが、そこから彼の姿が忽然と消えていた。

「なっ！ 野郎どこに行っ」ほう、此奴は上等な金属バットだな」
「！！！！？」

月出はその不良の背後に現れ、さっきまで不良が持っていた金属バットを手中に収めている

百代以外のその場に居た者全員が驚いた様子であった。

「京、今の見えたか？」

大和の問いに京はフルフルと横に首を振った。

「私の目でも捉えきれなかった。見えたのは不良の背後に出た一瞬だけ」

「5年前より格段に速くなってるな。あれは剣道の無刀取りを応用したものだろう」

百代だけは目を輝かせていた。

「…!?!? いつの間に背後に来たんだ!?!?」

「無刀取りっつー技術な。確かに良い金属バットだが……」

金属バットを横向きに持って、月出は腕力だけでへし折った。

「バットは野球っていうスポーツで使うもんだろう? アホすぎてそんなことも知らなかったか?」

「なっ!?!? 武器を取ったからってどうした! 俺たち九尾の犬は40人居るんだぞ!」

「……40人?」

月出は明らかに目を細め、嘲笑った。

「少ねえよ……。俺を倒したいのなら……」

月出はまた動き始め、回し蹴りからのストレートなどで不良をどんどん気絶させてゆく。

「傭兵部隊と戦車なりでも持ってくるこったな」

彼がそう言ったところには、必死に言っていた不良以外の全員が河原に倒れ伏していた。

「な、なんてこった……。……!?!? 聞いたことがあるぞ。金色の髪をした動きが見えない男……。金獅子っ……」

不良は間もなく倒れた。月出が鳩尾に拳を叩き込んだからだ。

「さて、帰るぞ」

鞆を持って前髪を元に戻した月出がファミリーの前に姿を現す。

「「「いつの間に来たんだよ!?!?」」」

翔一以外の男性陣の突っ込み。

「いや、普通に歩いただけだが……」

おかしいだろ! と言われるが、それでも気にすることなく歩みを進めた月出であった。

そのころのとある1年生の女子。

「あの人は……父上から聞いていた特徴と合致します」

「そうだぜまゆっち！ あれは間違いねえよ！」

と手のひらに乗せた馬のストラップと会話（自称）をしていた。

「南雲月出さん……寡黙な夜叉こと父上が認めた剣の天才ですね……」

少女は月出のことを知っている様子だった。

そのころの月出とは言う……。

「なんでまた携帯に電話をしてくるんだ？」

編入してからというものの、月出は燕とこうして通話することが多くなった。

「良いじゃん。こうして月出君の声聞きたいしさ」

今日はというと百代たちのことを話したりしている。

「いや、別にそう言うんなら良いんだが。こういうのは普通恋人にすることじゃないのか？」

「恋人……」

月出にはよく聞き取れなかったが、燕が黙り込んだ。

「おーい、燕？ 大丈夫かー」

「えっ、う、うん！ 大丈夫だよ！（そっかぁ。こういうのって普通は恋人がやるようなことだもんね……）」

「そうか、じゃあ良いか」

月出は特にその様子を気にはしなかった。

「そうだね、またね！」

「おう。……さて、そろそろ晩飯作るか」

月出は一先ず晩御飯の準備に取り掛かったのであった。

第4話 月出の実力？（後書き）

一応投下完了です。

感想でとある方に頂いた要望ですが、百代と燕の2人をヒロインと
いうことはやっぱりできなさそうです。

百代にフラグを立てるのはできそうですけどね。

僕はハーレム系とかあまりかけない人間ですので…。すいません。
感想や意見など、お待ちしております。

P・S

！ お気に入り登録数25件！ やったねまゆっち！ 友達が増えるよ

第5話 決闘前日（前書き）

あけましておめでとうございます。

2012年も小説活動、頑張りますよ！

第5話 決闘前日

月出の編入2日目である。

火曜日というのはなんか微妙な位置だよなんてことを思いつつまだ歩いて日も浅い、というか、昨日の行き帰り1往復しか歩いていないのだが……。

まあそんなことは置いといて、月出はいつものごとく人ごみの中を行くのが嫌なため早目に家を出たのである。

すると河原に出たところで……。源忠勝と鉢合わせした。

「あー。えっと……。源だったか？」

エレガンテクアットロ、クワットロか？　だのなんか割とどうでも良いイケメン四天王的な一角だと聞いたことがあった。

「チッ……。ああそうだよ、源だ。そういうお前は昨日編入して来た南雲だったか？」

舌打ちしつつもなんだかんだ言って名前覚えてんのな。と月出が言うとうるせえとだけ忠勝は返した。

この男、やはりツンデレである。

「一つだけ気になったんだが、良いか？」

この男が何を気にするんだといった様子で月出はなんだとだけ返した。

「お前、京都から来たんだろ。昨日見かけたが、お前があの金獅子か？」

その単語を聞いて月出は気怠そうな目をした。…いや、いつもよりもである。

「こっちじゃあまり知られてないと思ったがな……」

「俺は少しバイトをしていてな。そういう類の噂は耳に入るんだよ」
ほう。と月出は珍しく感心したように息をつく。

「どんな風な噂だよ？」

「知らねえのかよ……。西で悪事を働くチームの前に現れ、音も立てずに動き、気づいた時にはもう全滅させられている。特徴的な金髪から金獅子、または夜に現れ、寡黙なことから寡黙な夜叉と呼ばれている……って具合だよ」

「そいつは知らなかった。まあ、最初は暇つぶしでやってただけなんだがな。後々から向こうから喧嘩吹っかけてくるようになった……」
懐かしむように遠い眼になる月出。

「そりゃそうだが。一人で50人を超える、多くて100人近いチームをたった一人で壊滅させてんだ。嘘くさいつつて吹っかけるのは目に見えてるだろ」

「そういうもんかねえ……。100人組手するよりかは手っ取り早いと思ったが……」

そのまま変態大橋を渡り、学園まで忠勝と一緒に向かう。

2－S教室にて……。

すでに朝の予鈴が鳴る少し前の時間であった。

「2－Fに編入生とな？」

和服姿の少女もといヘタレクイーン（笑）こと不死川心は眉を寄せて言った。

「ああ、なんでも明日モモ先輩と決闘するらしいぜ？ まったく、得体が知れねえよ」

その問いに答えたのは心が広いがロリコンで残念なハゲ、井上準である。

「容姿端麗の金髪らしいですよ。いやあ実に気になりますね」

エレガントクワットロの一人、葵冬馬の発言に準は反応する。

「いや若、バイなのはわかりますけどね……」

「ウェーイ！　どんな人なんだろうね」

マシュマロをかじる元気な少女は榊原小雪である。

このSクラスはFクラスと同じくらいの変わり者の集まりであった。天才と変人は紙一重とはよく言ったものである……。

そんなわけで現在昼休みである。

よくわからんが百代と準で行うラジオ、LOVE川神なるものが全校放送で流されていた。

「さて、質問コーナーだ。おっと。ペンネームモモ先輩ファンさんから頂いた質問。「昨日の河原で決闘を受けていた金髪の男子生徒は誰ですか？」だそうですよ？ モモ先輩」

早速昨日のことが質問に挙げられていた。

「あー、月出な。2－Fに京都から編入して来たんだ。余談だが5年前、私と死合って勝っているのも奴だ」

「え、真剣っすか!？」

月出が恐れていたことが起こった。百代が自分に負けたことを明かしたのである。

校舎中から驚きの叫びが一斉に放たれていた。

「面倒なことしやがって……」

「おい月出、さっさと逃げたほうが良いぞ」

大和に促されてなんで？ と訊ねると彼は無言で教室のドアの方に顎をやった。

「あれがモモ先輩に勝った奴だと？ あんな優男が？ 許せん!」
などなど、彼女のファンクラブの者たちがすでに駆けつけていたのだ。

「あー、ちなみに私とあいつで明日決闘するからな」
百代は付け足すように言っていた。

「はあ、編入早々メンドくせえなア……」

月出はというと、席を立って窓際に立ち、昼食に作っていたサンドイッチを頬張り切ると、

「よっと……」

窓から後ろ向きに飛び降りた。

「え、ええええええええええ!!?」

「」

「」

「」

「」

先程の叫びと大差のない大きさの叫び声が響き渡る。

空中で2、3回捻りを入れてから月面宙返りをし、余裕綽綽で着地する。

「す、
すげえ……」

「はははは！ やっぱおもしれえな月出は！！」

「体操選手とかでも食っていけそうだな」

ガクト、翔一、大和の順で感想である。

月出はそのまま学園全体を高速で移動し、昼休みが終わるころには自分の席に戻った。

「ほんと、キャップと同じくらい風のような奴だな」

大和が漏らした声に、クラスの大半が同意したという。

その後、小島に危ないことをするなど嚴重注意を受けたのは余談である。

放課後はまた風間ファミリーの面々と帰り、アパートで燕と通話した後、決闘前夜で体調を整えるために早目に寝ましたとき。

第5話 決闘前日（後書き）

お年玉で5000円もらいました。
もう少し貯金でSが買えます…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8699z/>

真剣で私に恋しなさい！ 寡黙な夜叉

2012年1月1日23時29分発行